

2022年3月20日（大齋節第3主日、C年）牧師メッセージ
「履物を脱ぐ」

（ルカによる福音書 13:1-9）

司祭ヨセフ太田信三

今日の旧約聖書で、燃える芝の間からモーセに語りかけた神は、「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい」と言われました。「履物を脱ぐ」とは、所有権の放棄を意味します。神の声に応え、自らの所有を手放し、モーセは神のみ心に従って歩むこととなります。モーセとの会話の中で、神はご自身を「わたしはある」というものだと言われます。難解な表現ですが、これは、神は人の想像もできない方法で「ある」方であり、それは取りも直さず、わたしたちの想像など及ばない方法で、わたしたちと「共にある」ということです。モーセは、いかなる時にもこの神がともにおられることを知ったからこそ、自らの所有を手放し、民を乳と蜜の流れる地へと導くことへと歩みだすことができました。

「履物を脱ぎなさい」という呼びかけは、わたしたちにも向けられています。所有とは、土地やお金など、目に見えるものだけではありません。それは、神の呼びかけを無にし、他者の痛みを目を塞がせるあらゆるものです。大齋節は、神と他者の声を遠ざけている自らにとっての所有とは何かを見つめるときでもあります。神からの声に耳を澄まし、神からの使命を受け、所有を手放して神に自らを明け渡し、従う先に、今握りしめているものを遥かに超えた、豊かな恵みが用意されています。モーセのように、わたしたちの知る由もない方法で、神が必ず伴ってくださることを信じるなら、わたしたちは所有を手放して神に従って歩むことができるはずです。

今日の福音後半の「いちじくのたとえ」では、主人は三年間も待ったにもかかわらず、実をつけなかった木を「切り倒せ」と園丁に命じます。しかし、園丁は「来年には実がなるかもしれません」と願います。このたとえを、主人が神で、園丁をイエスと読むこともありますが、むしろこの主人と園丁のやり取りには、神の葛藤が表されているように感じます。神は、神の呼びかけを無視し、実りをもたらさない人間を裁くことの方が当然でありながら、一方ではあと一年、あと一年と待ち続けてくださるのです。ペトロの手紙Ⅱには、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」とあります。神が一年忍耐するということは、人の想像を絶するほど忍耐してくださることなのです。そしてその間も「木の周りを掘って、肥やし」をやるように、神はわたしたちのことを養い、導き続けてくださいます。これが「わたしはある」と言われる神の有り様です。「神などいない」と思われるその時においてなお、神はわたしたちと共に「ある」方です。モーセはこの神の養いと導きに自らを明け渡しました。わたしたちも、与えられた「一年」をどう過ごすのかが求められています。